

ジャグパル

JugPal

2006年10月28日 第35号



インタビュー

【香山啓さん・高村篤さん】

今回は一輪車の香山啓(かやま ひろみ)さんとジャグリングの高村篤(たかむら あつし)さんの登場です。

お二人は群馬県にある日本で唯一のサーカス学校「沢入(そうり)国際サーカス学校(註1)」の卒業生で、モスクワ国立サーカス団にペアでの演技をプレゼンテーションしていたところ7月に採用決定の通知を受け、来春からモスクワにあるサーカス劇場での出演が決まりました。

お二人は今もサーカス学校近くに住み、学校(廃校となった小学校の体育館がサーカス学校の練習場)で練習されているので、体育館で待ち合わせてのインタビューとなりました。



香山啓さん(右)と高村篤さん(左)

--- サーカス学校へ入学するまで ---

まずはどういったいきさつでサーカス学校に入学することになったのでしょうか。

ひろみさん

大学に入学して偶然知った大道芸サークルに入って、仲間たちと大須大道町人祭や静岡大道芸フェスティバルに出かけてマイム等のパフォーマンスを主に観客として楽しんでいましたが、大学生活に収まるにはエネルギーが余っていたようで、さらにはもともと身体表現には興味があったことから、「プレジャーB(註2)」のメンバーとなりクラウンとして活動するようになりました。

考えてみるとそこにいたモンゴル出身のクラウン・ハドガーとの出会いが、私をサーカスの世界へ導いてくれたのかもしれない。ハドガーにアクロバットやクラウニングを学び、モンゴルで開催された「国際サーカスフェスティバル」に参加することとなり、一週間のフェスティバル参加体験はまさしく人生の転機だったと言ってもいいでしょう。一生をかけるに値する仕事を見つけた旅でもあったように思えます。その後本格的にサーカス芸を学びたいとサーカス学校への入学を決意しました。

あつしさん

中学生の頃に魚釣りに行き、その日はたまたま何も釣れずに落ちていた石ころ二つを使って片手でお手玉遊びをしてみたらこれが結構面白いことに気づき、帰ってから早速家にあったお手玉で遊び始めました。そう言えば小さい頃父親に連れて行ってもらったテーマパーク内でのイベントで見たパフォーマンスもこんな事(ジャグリング)やっていたなあ、こういったパフォーマンスで生活できたらいいだろうなあ、などと思いつつ一人で練習をしていました。

ジャグリングへの興味は深まる一方で、いつの間にかこの道に憧れ、この道しかないと思い始めました。高校生の頃には道具も一通り取りそろえることができ、近くの公園で大道芸もどきのパフォーマンスをして投げ銭をいただくこともありましたが、また休日にはテーマパーク内で場所をあてがってもらいパフォーマンスをしたりしていました。そして高校卒業と同時にネットで知ったこのサーカス学校へ入学しました。

--- 海外留学について ---

サーカス学校に入学した彼らの在校中に共通した経験のひとつに海外留学があげられます。ひろみさんはモンゴルへ半年間、あつしさんはウクライナへ二年間留学したそうです。

ひろみさん

国立モンゴルサーカスに半年間留学しました。

凄く厳しかったです！その厳しさに負けない体力はサーカス学校で身につけてはいたけれど、(演技としては)何もできないままに行ったのでかなり辛かったです。何もできなかったけれど、専属トレーナーから徹底的に基礎技術を教わり、一番大事な基礎を身につけることができました。基礎をベースに自分なりの練習方法を見つけて今のプログラムを仕上げるのができたのは、あれだけ厳しい練習があったからこそだと思います。今のプログラムを構成する技術の基礎は全てここで教わりました。

サーカス芸に危険はつきもので、とても厳しいコーチだったけれど、つきっきりでマンツーマンで見守ってくれたから危ない芸でも乗り越えて習得できたんだと思います。

あつしさん

ウクライナのサーカス学校で2年間研修生として学びました。

練習は厳しくても充実していましたが、入学して一年半後、つまり研修生としての期間終了間際に大きな壁にぶちあたり、今までのジャグリングに対する考え方が根底から崩れてしまいました。

中学生の時に偶然の慰みから始めたジャグリングは興味深く楽しいものでした。でも楽しさだけで投げているといった遊びの延長感覚での練習には限界がきてしまったのです。

そもそも遊びから始めた独習でのジャグリングということもあり基本がなってなかったんですね。練習の質を高めていくためには、基本的な考え方なり心構えが必要で、本質をとらえていないとダメなんです。基本がある上で必要な技術は何か、トレーニング方法はどうすれば良いか、と順序立てて考え工夫して研究していくことが必須なんです。

先生の指導に従って言う事を聞いていれば誰でもある程度は上達しますが、それは単に仕込まれたもので自らが学びながら習得したものではないんです。技術的に発展していくには自分の力で研究して見極めていく必要があります。「知識」と「理解」とは全く意味合いが違います。つまり知って練習するのと、理解して練習するのは違うということです。

今練習していて当時の先生の言葉の(真の)意味が分かることがあります。もちろんその言葉に対して今では自分なりの意見が持てるようになったし、そうやって自分なりに研究を深めていきたいと思っています。



沢入国際サーカス学校練習場



練習場(体育館)の内部

--- モスクワのサーカス出演について ---

ひろみさんの演技は一輪車を自由自在に乗りこなしてのバランスアクト。一輪車で階段を上ったり、駆け下りたりとスリリングな芸を披露し、トリの演技はサドルの位置が3mもある大一輪車でのパフォーマンス。

あつしさんの演技はジャグリングで、トリの演技は長さ4mのバランス棒上の筒にジャグリングしながらボールを投げ入れるというもの。

もともとはそれぞれがソロで活動していて、二人の演技を組み合わせたプログラムが認められモスクワ行きが決定しました。これは日本のサーカス界の快挙と言ってもいい出来事で、サーカスアーティストを目指して日々練習を積み重ねている人達にとって共通した夢の実現でもあることでしょう。

ひろみさん

お互いのソロ演技に加えて二人が組む事によってアピールでき、先方に受け入れられたんだと思います。

二人で組む事によって一步踏み出すことが出来たんです。私にとってはとても大事な一步で、後輩達にとっても、西田さん(サーカス学校長)にとっても意味のある一步なんです。そういった気持ちを大切にしたいと思っています。

あつしさん

サーカスに出演するのは凄い魅力的なことで、モスクワでの経験の中から吸収すべきことは全て吸収してさらなる次へのステップへ続けたいと思います。

--- モスクワ行きの準備について ---

モスクワへ旅発つ前の数ヶ月間で、現在のペアでのプログラムにいろいろと演出面で手を入れる必要があるようです。具体的にはサーカス団からの要望でもあるのですが「和」の要素を取り入れなくてはなりません。

「和」の要素を取り入れるにあたって、構成面や演出面でこの時点(9月23日)ではまだまとまっていないようで、会話の中では随所に二人の考え方の相違が見られました。インタビューの最中も二人の意見の衝突から議論が始まり、それが延々と続き、インタビュアーそっちのけ状態が幾度と無くなりました。(汗)

“個”で活動していたアーティスト同士の意見がすんなりとまとまって、和気あいあいと仲良く作品ができるとは思っていませんが、作品作りでの両者の葛藤を垣間みることができ、門外漢の私はちょっとドキドキでした...(笑)でもこれから西田さん(サーカス学校長)を含めて三人で話し合わせ、きっと素晴らしい作品が仕上がるものと期待しています。

ひろみさん

極端に言えば今二人でやっているプログラムはお互いのソロの作品をそれほど崩すことなく組み合わせているだけなので、コンビネーションが弱く、そこを強化しなくてはなりません。

「和」には凄く興味があって、例えば太(大)神楽の芸や衣裳や音楽について調べていくうちに、自分にとってこんなにじっくりくるものがあったんだと感じています。現在のプログラムに「和」の要素を中途半端に取り入れるのは嫌で、しっかりと「和」を意識して作品を作っていきたいと思っています。



あつしさん

正直今のプログラムでそのまま通用するのならそれがベストですが、それは無理なのでここにどうやって「和」を取り入れるか悩んでいます。

ジャグリングをやっていく上では、サーカスが僕の舞台になるんだと思うし、ウクライナの先生は端(はな)からそれを読んで指導していたんだと今になって感じます。僕のどの技術が光って、何が光らないのか全て分かっていたようです。従って和的なものを入れれば入れるほど学んできたものが生かせないかもしれない、そういった不安が正直あります。



あつしさん(左)とひろみさん(右)による演技

--- サーカスへの思い ---

お二人にとってサーカスとはどういったものなのでしょう。

あつしさん

ウクライナで思ったのは、国自体がそれ程豊かでないということもあり生徒にとってサーカスというのは生きる術(すべ)そのものなんです。一方日本人である僕は極端に言えば何をやっても食べていけるでしょう。好きだという気持ちだけではジャグリングは続けられないということが研修で分かったように、確かにサーカスが好きで魅了されているけれど、それだけではダメなんです。

サーカスとの関わりについては、(サーカス入りを迷っているということではなく)いつも考えています。サーカスに関しては全くの素人だけれど、でも僕の唯一の武器はジャグリングだから、これを使って、これから自分なりにサーカスを吸収していきたいんです。

ひろみさん

確かに私は子供の頃から練習してきた訳でもなく、例えば小さい頃から親元を離れた合宿生活で練習している中国雑技団メンバーと比べれば技術的には劣るでしょう。

私自身20才を過ぎてクラウンそしてサーカス芸を練習してきた訳で、でもだからこそ私だからできる、私にしかできない作品を考えて作っていきたいと思っています。そうやってサーカスの世界で生き残っていききたいんです。サーカスの世界で生きて行くにはどうしたらいいのか、これからもこれ一本に絞って考えていきます。

そのためには技術的になれない部分をどう埋めていくかが、自分にとっての課題の一つだとも思います。



あつしさんのボールジャグリング

--- これからの二人 ---

お二人はこれからどういったアーティストを目指していくのでしょうか。

ひろみさん

サーカスアーティストとして活動していきたいです。

クラウンとしてパフォーマンス活動を始めて、やがてサーカス芸を目指すようになり、そういった中で周りにいる諸先輩の芸人さん達はいろいろな選択肢がある中でそれぞれの道を歩むのを見て、私自身もいつまでサーカスにこだわっていくのか、何故サーカスにこだわるのか悩み葛藤し続けていましたが、今回のモスクワ行きをきっかけに、ようやく自分の進むべき道が見えてきたような気がします。サーカスに行きたいという気持ちを長い間持ち続けて良かったと思うし、それを支え続けてくれた西田さん(サーカス学校長)を始め多くの人達に感謝しています。いろいろな人の支えがあって今の自分の芸がある訳ですから。

クラウンとして活動した頃の頃、モンゴルの「国際サーカスフェスティバル」で舞台のそでから見た中国、ロシア、北朝鮮のサーカス団が放っている“キラキラ感”に心を奪われました。その時思ったんです。自分の芸でそこ(舞台)に立ちたい!

それが私の原点であり、何か迷い悩む時にはいつもその原点に立ち返るんです。

今舞台に立つということが夢ではなく現実のものになりつつ目標となっている実感があります。だから目標はサーカスアーティストとして活動すること、言い換えると自分の作品をサーカスでやり続けること。

そして夢は、モンテカルロ(註3)に出演すること…!でもこれは大き過ぎる夢で、叶いそうな夢としてはサーカス学校の後輩達と一緒に新しいショーを創りたいなぁと願っています。

あつしさん

ジャグリングをやり尽くす、見極めるってことかな。身体作りを含めて技術的な面はこれからも徹底してやっていきます。

何故なら極論言えば僕にはジャグリングしかないし、これを武器にするしかないから。

えっ!? 夢ですか…「結婚して子供を作ること。」かな。(笑)

[安部 保範]

(註1) 沢入国際サーカス学校

サーカスアーティストやクラウン等を目指す人々の訓練の場。2001年9月に群馬県みどり市東町(旧勢多郡東村)に開校(学校長 西田敬一)。廃校となった沢入小学校の体育館を練習場としている。NPO法人国際サーカス村協会(理事長 西田敬一)が創立し運営にあたっている。

<http://www.circus-mura.net/>

(註2) プレジャーB

1994年に結成された名古屋を活動拠点としたクラウンによるパフォーマンス集団。

http://www.pleasure-p.co.jp/plea_b/index.html

(註3) モンテカルロ

モンテカルロ国際サーカスフェスティバル
<INTERNATIONAL CIRCUS FESTIVAL OF MONTE-CARLO>

世界のサーカス界で最も権威あるフェスティバルで、1974年にレーニエ大公によって創設され、大公自らが大会委員長を務める。審査委員が「ゴールデン・クラウン賞」を決定し、それはサーカス界の「オスカー」と称されている。



ひろみさんの一輪車



ブログ風アート見物記

【7月～9月分】

ザ・アイリッシュダンス「ラゲース」(7月1日/横浜関内ホール)

10名のダンサーとバックの演奏者5名とごちんまりとしていて、「リバーダンス」ほどの迫力も「ロード・オブ・ザ・ダンス」ほどの娯楽性はないけれど、アイルランドの民族性がより強調された演出で十分楽しめた。

爆笑いりもの演芸大行進 (7月14日/浅草東洋館)

観客・演者含めても私が一、二を争う程の若者(^^;)で、しかもなんじゃコレ?といった演芸が次から次へと出てきて、そんな摩訶不思議な高齢者ワールドであっけにとられていたところに、シメが牧伸二さん(東京演芸協会会長)ってのが最高!ウクレレ漫談健在!

マジックバー「十二時」(7月20日/銀座十二時)

マジックバーは初体験。約30年マジックを見ている者にとって居心地はどうなんだろうと若干不安だったけれど素直に面白かった!楽しませてくれたマジシャンはGEORGEさん、喜代野さん、Mr. MASAO。

フラメンコショー「エルフラメンコ」(7月21日/新宿エルフラメンコ)

それなりに楽しめましたが、本場スペインで観たフラメンコと比べるとやはり"それなり"といったところか。

一龍斎貞水 怪談の夕べ (7月27日/新宿住友ビル朝日カルチャーセンター)

講談(怪談)と対談を楽しむ会。読み物として四谷怪談から「伊右衛門の最后」。観客が来ないのは演者にも責任があり、「講談は守るべきものと開拓すべきものがある」との信条から立体講談なるものを考案し、深みある語り口がさらに迫力あるものにと日々進化を続けている鬼才一龍斎貞水さん。明治生まれの大御所ばかりの講談界に若干16才で飛び込み、壁を自ら築きそれを乗り越え、また次のさらなる大きな壁を乗り越え、さらにまた・・・そうやって芸に精進していき、「偉大な未完成」という言葉が好きだと仰った芸人。

アクロバティック 白鳥の湖 (7月29日/Bunkamura オーチャードホール)

演技は広東雑技団によるもの。差し物、ボール、コントーション、ラート、ハット、ロシアンバー、綱渡り、空中もの、トランポリン、一輪車、バンジー、空中ブランコ・・・いや～出るは出るはサーカス芸が次々と。クライマックスシーンを飾るのはもちろん「東洋の白鳥～頭上で舞うバレエ(2002年第26回モンテカルロ国際サーカスフェスティバルにてゴールデン・クラウン賞受賞)」

私は一風変わったサーカスを見るつもりで来たのだけれど、バレエと勘違いしてきた観客もいるのでは?だとしたら腹立たしいだろうなあ。

YOKOSUKA Jazz Dreams 2006 (7月30日/よこすか芸術劇場)

出演はNo Name Hoses with 小曾根真、寺井尚子クインテット、渡辺貞夫グループ2006。どれも素晴らしい! No Name Hosesは思った通りイカしているし、ナベサダさんも力が抜けた本当にリラックスした心地よい癒しの演奏を聞かせてくれるし、最大の収穫は寺井尚子! MCが例えて言いました。「400mを全力で失踪していくアスリートのようなアーティスト」まさにその通りで情熱そのものが官能的な音となって飛び込んでくるので身体の中から熱くなるぜえ。それ以来寺井尚子さんにハマってます。CD「夜間飛行」はお薦め。

ブラスト2:MIX (8月11日/東京国際フォーラム)

前作より「見せる」ことを前面に押し出し、身体表現のパフォーマンスをふんだんに取り入れているような気がする。ダンサーを配備しバク転やらバンジーやら、かつ稲垣正司さんをはじめとした超一級のバトントワラーによる演技がたっぷり楽しめるなどサーカスを彷彿させる演出になっていた。

熊川哲也「サマー・トリプルビル」(8月13日/文京シビックホール)

Kバレエカンパニーによるトリプルビル(演目がラプソディ、セレナーデ、若者と死のトリプルビル)。ジャン・コクトーの「若者と死」が熊川哲也さんと中村祥子さんにより演じられたが、陰影に富んだ切迫感溢れる舞踊にぐいぐい引き込まれてた。カーテンコール時に一階フロアにダッシュして間近に見たお二人の格好良さに惚れ惚れ ブラボー!

高校吹奏楽部定期演奏会 (8月15日/茅ヶ崎市民文化会館大ホール)

娘の吹奏楽部の演奏会。だから?・・・って、そんだけの話(^^;)。

映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」(8月16日/新宿TOKYU MILANOビル)

演劇「紙屋町さくらホテル(井上ひさし)」を見ようとかなり早めに紀伊國屋ホールへ行ったものの既に当日券は完売。がっかりして何を血迷ったこんなものを見てしまったが、案の定ツマラン・・・見なきゃよかった。

「手品?MAGIC?トリック」展 (8月16日/大崎ゲートシティホール)

河合勝さんと澤田隆治さんによるコレクション展示(ポスター、和書、辻ビラ、錦絵、絵看板など)。展示の他にマジックショーやら講座やらテンヨー製品販売まであって家族で楽しめる夏休み向けイベント。江戸中期(1697年)～平成13年(2001年)までの304年間に発行された奇術関係の文献目録「日本奇術書目録(河合勝編)」を入手して大喜び。

プラス2:MIX (8月16日/東京国際フォーラム)

二回目。今回は吹奏楽部でパーカッション担当の娘と行く。その迫力と娯楽性に度肝を抜かれたようで、休憩中と終演後にロビーで行われた演奏も聞き逃さず、メンバーの一人と握手してご満悦の様子。

ジャグる 廻す 舞わす (8月19日/県民共済みらいホール)

古くからお付き合いさせて頂いている水野さんの芸歴を辿ってみると常に変化し続けていることに驚くが、その変化の中にもひとつ筋が貫かれているといった感じを受ける。ジャグラー・マサヒロ水野、江戸曲独楽師・三増左紋、神楽師・倉谷仙太郎・・・いやはや。そんな多面性を持つ水野さんのジャグリング、曲独楽、獅子の舞が繰り広げられ、とてもバラエティに富んだエンターテインメントショーに仕上がっていた。

第62回舞台芸術講座 クラシックバレエの魅力 (8月26日/神奈川県民ホール)

スターダンサーズ・バレエ団代表の小山久美さんが講師となり、バレエの誕生(ロマンティックバレエ)から現代バレエにいたるまでの、各時代における表現方法や技法を実演を盛り込んで説明して下さり実に分かりやすかった。

講座の最後に「情熱」と「先人達への敬意」についてお話し下さいましたので紹介しましょう。情熱については『壁にぶつかります。ぶつかり甲斐のある壁で、乗り越えてもまたそこには壁があります。それでもまた乗り越えます。情熱がそうさせるのです。』と述べ、『歴史はつながっていて、私たちは受け継いだ歴史をまたつなげていきます。古典作品を疎かにせず新しい作品を創ることによって。』と先人達への敬意を忘れてはならない事を語っておられました。

へいせいの田楽「平家女護島」をかぶく (9月8日/シアター)

演出・台本は西田敬一さん。正直私にとってこの種の舞踊は新たな体験だったので最初は戸惑いましたが、徐々に舞台上で踊るダンサー達の表現に集中する事ができました。でも例えば舞踊鑑賞の経験のない友人達に見に行くよう薦められるかという...やはり無理かな(^_^)。一般的に求められるミーハー心は満たせられそうにないから。

"The Experience"マジック革命 セロ (9月9日/東京国際フォーラム)

テレビで大活躍のセロのステージでのマジックショー。TVで見るとようなクローズアップとイリュージョンマジックが主だったが、FISMのコンテストという経歴から、カードマジック、ロープそしてシガレットとスライハンド系のステージマジックが見られたのが収穫。上手かった。

六国祭 (9月10日/ 高校校庭)

娘の通う高校の体育祭。だから?・・・って、そんだけの話(^_^)。でもチアリーディングは結構見物でした。おじさん一人で盛り上がっていました!ところで皆さんチアリーディングとチアダンスの違いが分かりますか?

国際サーカス村協会 月例会 (9月29日/千駄ヶ谷区民会館)

カンボジアのサーカス学校とチリを訪ねた協会員Oさんからの報告。

カンボジアの都市バタンバンにあるサーカス学校は、ファー・ポンルー・セルパク協会

(Phare Ponleu Seipak)というコミュニティのひとつで、他には音楽学校や絵画学校があるとのこと。侵略と内戦に綴られた歴史的背景から経済的援助が必要な貧しい子供達が来たい時間に来て練習をして、現在までに4つくらいのショーが作られ、そのうちの一つはフランスで巡業しているとのこと。来夏日本での公演も予定されているようです。

チリはサーカスが大衆娯楽として根付いていて大小様々な80ものサーカス団が国内に存在し、独立記念日に訪問した事もあり、12ものサーカスが首都サンティアゴに集まっていて、いずれのサーカスも大盛況だったようです。

ポップサーカス (9月30日/横須賀公演 平成港特設大テント会場)

ポップの中で一番好きなのはシフォン。今回シフォンのペアが新しい男性と女性に変わっていたが、彼らもなかなかイイではないですかあ～!(*^o^*) 休憩に入る前の定番だった観客参加のトランポリンショーが無くなって、ダンス(観客参加)に変わったのがちょっと残念。

[安部 保範]